

〔書評〕

柴田 武編

『奄美大島のことば——分布から歴史へ——』

昨年、柴田武博士の編著になる言語地理学の研究書『奄美大島のことば——分布から歴史へ——』（秋山書店）が、真田信治、下野雅昭、沢木幹榮、諸氏との共同執筆によって出版された。日本の言語地理学の分野に一つの大きな成果が加わったことは、言語学者、方言研究者にとって大変よろこばしいことである。

本書は、日本の言語地理学の中で、どのような位置を占めるであろうか。言語地理学の流れの中でそれを検討し、内容を紹介しながら感じたことを述べることにしよう。

言語地理学は、フランスで、J. Gillieron によって『フランス言語図巻』が出版されて、はじめて言語学の一分野としての市民権を得た。そして日本の言語地理学は、ヨーロッパにおける言語地理学の出現と、あまり遅れない時期にはじまった。全国方言を対象に、その分布図を描く試みは、一九〇三（明治三六）年に国語調査委員会が音韻と口語法について全国調査を実施し、『音韻調査報告書、音韻分布図』（明治三八年）、『口語法調査報告書、口語法分布図』（明治三九年）を出版したときにはじまる。これらは通信調査という制約の中で行われた研究であったが、日本列島の全域について、言語の分布様相を概観できたことは大きな収穫であった。

中 本 正 智

こうして出発した日本の言語地理学は、昭和に入ってからさかんになる。江実氏の『言語地理学』（昭和一〇年）、松原秀治氏の『ドーズ・フランス言語地理学』（昭和一三年、三三年訳）などによってヨーロッパの言語地理学が紹介される一方では、柳田国男氏の『蝸牛考』（昭和五年）、上野勇氏の『方言地理学の方法——赤城南麓方言分布——』（昭和一六年）、土川正男氏の『言語地理学——日本方言の歴史地理学的研究——』（昭和二三年）、小林好日氏の『方言語彙学的研究』（昭和二五年）など、日本の方言を材料としたオリジナルな言語地理学の成果が発表されている。

このような研究に続いて、日本の言語地理学に飛躍的なできごとが起こった。それは国立国語研究所による『日本言語地図』（昭和四一〜五〇年）の出版である。これは、昭和三二年から三九年の間に二四〇〇地点を二八五項目について臨地調査を実施し、三〇〇枚の分布図を六巻にまとめたものである。さきの国語調査委員会の調査が通信調査によるものであったことを思うとき、臨地調査による本研究の価値は自ら高められるであろう。この調査研究は全国の方言研究者の協力なしには生まれなかったが、その中心的立場にあったのが柴田武博士であり、グローターヌ神父や徳川宗賢氏であった。

この研究の刺戟によって昭和四〇年代は、ブームと云ってよいほど日本の言語地理学が盛りあがった。大学の研究室を中心に、ゼミなどでいろいろの地域の言語地理学的な研究調査が実施され、その成果が発表されていった。現在はブームは沈静化しているけれど、多くの研究者によって各地で着実に研究が深められている。

日本の言語地理学的な研究は、地域的な広がりをもせており、広戸惇博士の『中国五県言語地図』、藤原与一博士の『瀬戸内海言語図巻』(昭和四九年)などが完成し、各地の言語地理学的研究がさかんになっていた。

ところで、これまでの言語地理学の研究をながめてみると、その主流は、陸続きのフィールドにおける言語の歴史的発達の解明にあったといつてよいだろう。それはヨーロッパにおいても同じであつて、言語地理学の宿命的な傾向とみてよい。とはいへ、日本が、日本と琉球の両列島を合わせた多島国家であることを思うと、陸の言語地理学のほかに、島の言語地理学を考えないでは、健全な言語地理学の発展はのぞめないと思われる。

そこで、ただ一つの例外は、藤原与一博士の『瀬戸内海言語図巻』である。これは島の言語地理学を考えさせてくれる大著である。しかし惜しいことに、瀬戸内海の島々は、一往、海中の島々ではあるが、中国と四国及び九州、近畿に四周囲われた内海に点在しているのので、そこでの言語の広がりかたは、陸地とさして変わらないように思われることである。島の言語地理学を考えるには、内海という環境は、けつして好ましい条件とはいへなかつたのではないだろうか。

柴田博士は日本における陸の言語地理学に主導的な役割を果たされたが、島の言語地理学にも目を向けられた。昭和五二年に『奄美徳之島のことば——分布から歴史』(協力者と共著、秋山書店)を出版されたのだが、その中に、調査研究の特徴として次の項目がある。

- (1) 孤島の言語地理学の方法について挑戦したこと。
- (2) 空間関係の語彙の「体系」を採りあげたこと。

(3) 音韻項目の分布図からこの方言の音韻法則を見つけたこと。

(4) インフォーマントをサンプリングで決めたこと。

(5) コンピュータによって地図を描くことを実用化したこと。

項目の最初に孤島の言語地理学の方法があがっていることから知られるように、博士は島の言語地理学に強い関心を寄せておられる。

今回の大著では(1)から(3)までの項目はそのまま踏襲し、(4)(5)のかわりに次の二項目を加えている。

(6) 新しい方言区画の方法を提示したこと。

(7) 古代日本語の母音音価の推定をこの方言の資料と分布図から試みたこと。

前著『奄美徳之島のことば——分布から歴史』と今回の『奄美大島のことば——分布から歴史』は、姉妹編といふべき著作であり、いずれも島内の言語地理学を深めたものである。

これらについて、博士は次のように表明しておられる。

島内の言語地理学については、これで方法としても確立したと見られるが、島間の言語地理学の方法は今後に残された課題の一つである。(本書、P.3)

島の言語地理学に目を向けられたのであるが、島と島の関係を視

野に入れた言語地理学については問題が今後にもちこされている。私は島内の言語地理学は、陸の言語地理学と同列のものであり、島の言語地理学は、島と島との関係のみが中心でなければならぬと考えている。

日本で島の言語地理学を行うためには、日本海沿岸と黒潮の流れる太平洋沿岸と、南の琉球列島が絶好のフィールドではないかと思う。これらの地域はいずれも古くから海上の道となっていて、全列島をながめていると、列島最大の強文化圏である京都を含む近畿地方から列島全域への語の波及を考慮することができるのである。琉球列島では近畿からの波及のほかに、琉球列島の強文化圏にあたる首里を含む沖縄中南部域から琉球列島全域への語の波及の様相がみられ、複雑な層を示している。

このような恵まれた日本列島の環境の中で、島の言語地理学が明らかにできる問題は多く、これからの研究に期待される。島の言語地理学のもつ歴史言語学の可能性については、まだまだ十分ではないが、拙著『図説琉球語辞典』の二〇〇余枚の言語分布図の解釈によって試みてみたけれど、大変に有効であることがわかっていく。今、語を増やして考察を進めているところであるが、博士らの豊富な言語地理学体験を生かして、列島の言語地理学をせひとも理論化してほしいと願っている。

この大著を編者が表明されたように、島内の言語地理学の成果として位置づけたところで、その内容をみることにしよう。まず本書は次の点で画期的といわねばならない。

(1)島の言語地理学のフィールドとして、もっとも有効な地域の一島を調査したこと。

(2)琉球の北翼になう奄美大島という奄美最大の島を全地点調査したこと。

本書の目次の概要を示せば次のようである。

1、はしがき

2、調査の概要。調査地域、調査地点…。

3、社会項目。インフォーマント、行政区画とその歴史、文化圏、方言意識、民俗…。

4、言葉の分布と歴史。

空間言葉。方位名、東、西、南、北…。風位名、風名全般…。

その他、浜の方、山の方…。

地域と住民の名称。大和浜、与路、古仁屋…。

俚言。動物名、かまきり、おたまじゃくし、蛙…。植物名、

里芋、さつま芋、バナナ…。身体名、手のひら、手の

甲、足の裏…。その他、肩車、匂い…。

待遇表現。人称代名詞、わたしは―目下に、わたしたちは―目下に、目上に―…。動詞部分、行くのか―目下に、行くのか―目上に―。助詞部分、「どこへ」の「へ」、「遊びに」の「に」

5、アクセント

6、音韻変化。全島の変化、母音音素、子音音素、*ti di si · tu du su*、局地的音韻変化

7、奄美大島の方言区画。方法、ネットワークの濃さ、各地点のネットワークの広がり、方言区画

8、上代甲乙音との対応

9、参考文献

10、地図索引

11、あとがき

12、事項索引

13、単語索引

昭和五三年、九学会連合の調査で奄美大島を訪ねたときであった。柴田博士がリュックを背負われ、登山帽を被り、軽い足どりで調査地へ向かわれるところに、行き違ったことがある。あのときの臨地調査が、このような形になってまとまってみると感慨一入である。本書は、執筆者のほかに、日下部文夫氏と三石泰子氏を加えた六名の調査員によって143地点の全集落を臨地調査した資料にもついている。

本書の内容は、目次からうかがえるように、大きく、文化、民俗的な背景、語や音韻アクセント、方言区画の三つに分かれる。

奄美大島の全集落を対象にしてこれらが分布図で示され、執筆者がこれを分担し、解説している。全体が美しい分布図と要を得た解説となっている。ただし、分布図が多いためか、項目と項目の分布図の間に空白が多いところがめだつ。これはレイアウトの問題で内容と直接かわるものではない。地図はいずれも奄美大島における人間の生活を感じさせてくれる。以下、問題点を含めて感じたところを述べてみよう。

027図は、奄美大島の「ことばは沖縄と鹿児島どちらに近いか」という問いに答えた分布図である。沖縄に近いと答えた地点が60弱、鹿児島が30強、どちらでもないが30弱、となっている。奄美大島の言葉は、言語学的に比較すると、沖縄にはるかに近い姿を示しているのに、「鹿児島」と「ことばは沖縄と鹿児島どちらに近いか」を合わせた数が、ほぼ半分であることは、大変に興味深い。

奄美地域は、本来琉球王国の中に含まれていたのであるが、一六〇九年の薩摩の琉球入りを契機に、琉球王国から分断され、薩摩の直轄領となった。廃藩置県の行政区画も鹿児島県に属し、現在に至っている。この分布図は、奄美大島の鹿児島志向についての、この辺の事情を物語っていると思われる。同じ質問を沖縄で行なったらどうなるか興味のあるところである。おそらく「鹿児島」と答える人はほとんどいなくなるほど減ってしまうのではないかと予想される。一口に琉球列島といっても、島々の生活感覚はそれぞれ異なっていることを教えてくれる。

100図は、「浜の方」の「方」にあたる語、*ute bore buti* などの分布図である。いったい、この語はどのようなものであろうか。本書では、**o:oi*「ほとり(辺)」から出た語と解している。たしかに奄美大島内の語形を見ている限りにおいては、これでよいと思うのだが、沖縄方言で「方」にあたる *yem:ii* がある。これをも視野に入れると別の解釈が成り立つ。つまり、「面、表」を表す **omote* にさかのぼるとみることもできるのではないか。

127図は「かまきり」の分布図である。奄美大島の全集落は、143地点であるのに、そこでの「かまきり」の方言形が75種もあるというから驚かされる。これはど音声的な変種が多く、一語形は二集落ぐらいいでしか共有できない勘定である。琉球列島は島と島の間には大きな方言差があるけれど、島の内部にも大きな方言差があることがよくわかる。これら無数の音声変種を比較検討して、類なり系なりにまとめることが、いかに大仕事であるか思いやられるのだが、結果として、次の四種にまとめられている。

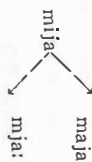
- ① *zi|fatom@zi|fotomai* ② *zi|fotomai*
- ③ *zi|fotomai* ④ *やの他*

この中で①が最も古層のものとして推定してある。これは正しいと思われる。ところで、168 ページの変化の推定表で南部に *ʔiatomai* が示してあるが、これは *ʔiatomai* の誤りではないだろうか。169 ページに、「かまきり」を表す方言の「前部形態素としての *ʔi: ʔi: ʔi:*」は、あるいは「酔い」と関係があるかもしれない」とあるが、これはインフォーマントの語源解釈にたよりすぎたもので、音韻的に「酔い」ならば、*ʔi:* であって、グロッタルストップが語頭に立たないので、「酔い」と関係ないものと判断すべきではなかったであろうか。

133 図は「蛙」の総称の分布図である。*bik:* 類が南部に、*bik:* 類が北部に分布している。*bik:* が基本の形で、これに接尾語の *a* をつけて、*bik:* *a* を派生させたとみられるから *bik:* *a* *bik:* *a* の推定は正しいと思われる。しかし、わずかであるが、*zatabiki* (大きい蛙) が現れている。これは「誤って回答されたものであろう」とされているが、琉球列島全域の分布を参考にすれば、もっと別の解釈もありえたのではないだろうか。たとえば、『図説琉球語辞典』の 132 ~ 133 ページの分布図をみると、奄美大島と喜界島に *bik:* 系、徳之島と先島に *awata* 系、沖縄、与論島に *ataviki* 系、沖永良部島に *gata* 系がある。この分布から解釈すると、*awata* 系が古い層としてあり、その上に *bik:* 系が波及し、その際、沖縄、与論島で *kontami* ネーションを起こして *ataviki* 系を生み、奄美大島、喜界島で *awata* 系をほろぼして *bik:* 系となった。*ataviki* 系はその際の派生形で、沖縄から入ってきたのかもしれない。奄美大島のことばを正しく理解するには、できるだけ広い列島域の視野が必要となってくるのではないだろうか。

同じようなことは、149 図の「猫」の分布図についてもいえる。奄美大島の北に *maja* などがあり、南に *mja:* などがある。これは、*maja* \vee *mai-a* \vee *mja-a* \vee *mja:*

のように変化したと想定している。ところが分布図をよくみると、古層をとどめる南の瀬戸内町地域に *mja:* が分布している。ひょっとすると、この *mja:* は古いかもしれないと思い、『おもしろさうし』の「猫」を表す語形を調べてみると、果たせるかな、「みや」が出てきた。そして琉球列島全域ではどのように分布しているかを『図説琉球語辞典』の 144 ~ 145 ページの分布図でみると、*mja:* を含む語形をもつ地域は、瀬戸内町地域のほかに、沖永良部島、与論島である。徳之島と沖縄は、*maju*, *maja* の地域に属している。してみれば、文献上の語形や分布からいって、*mja:* を古層とみとめ、その変化過程を略記すると、



のようになる。つまり、奄美大島に分布している *mja:* と *mja:* は、親子関係に類する変化ではなく、いずれも、*mja:* を親とする派生形とみることができると。

あと一例をあげると、130 図の「パイヤ」の分布図は、奄美大島の北に *mando:mai* 類、南に *mokka* 類、名瀬を中心に *papajia* 類が分布している。*papajia* 類は新しい形であるから、問題は *mando:mai* と *mokka* である。これについて、「どちらが古いかは分布からは決めがたい」としている。『図説琉球語辞典』の、132 ~ 133 ページの列島全域の分布図をみると、*mokka* 類は奄美大島と

徳之島に限定されて分布している語形であり、琉球列島の他の島々は、すべてマンジュ系かパイヤ系である。この分布からみて、HOKKA系は一六〇九年の琉球入り以降、奄美大島から入り、奄美地域だけに広まったものであることがわかる。したがって、mandŋo:maiより新しい語形であると判断せざるをえなくなる。島内の分布だけでは解けなかった問題が、列島全域の分布を援用すれば解けるようになる。

音韻については、奄美大島は、佐仁方言などにハ行P音を残していたり、全域で語中のカ行子音がh音化したり、瀬戸内町で閉音節化などがさかんに行なわれたりして、全体的に音韻変化がはげしい地域であるが、これらの現象も地図でよくとらえられている。

本書の一つの眼目は、伝統的方法と異なる客観的方法による方言区画にある。この方法の特徴は、

(1) 材料を選択することなく、一つ残らずとりあげる

(2) 地点間の語形を共有する関係にもとづいて作ったネットワークの濃さと広がりによる

というものである。従来の方言区画は資料の中から適当な特徴を選んで比較し、方言間の差をもとめたのであるが、この方法は手持ちの全資料を比較して地点間の方言差の集積で方言区画を試みようとする極めて科学的なものである。ネットワークの広がり地図をすべて重ねて出てきた区画をいろいろ修正して奄美大島の方言区画とし、

A アカタナ B 古見 C 大和浜 D 宇検村 E 住用北 F 住用

南 G 瀬戸内

となった。これは、これまで知られていた奄美大島が南北に大きくわかれるという常識的区画もとり込んだ厳密な区画となっている。

上代甲乙音との対応について、従来、オ列とイ列に甲類と乙類が残存していることが言われていたが、これを奄美大島全地点で調査し、確認している。対応するものもあり、例外もあって、さらに検討の余地が残されている。甲類と乙類の区別の問題は、名嘉真三成氏の宮古方言の研究でも問題とされ、いまや琉球列島全域の問題となってきたから、他島との比較が大切となってきた。その方向へ研究が発展してほしい。

以上、『奄美大島のことば——分布から歴史へ——』について感じたことと一端を述べた。読みちがえたところがあるかも知れないし、大事なことを言い落としたかも知れない。ご寛恕を願いたいと思う。

ここで細かな点について指摘させていただいたが、これによって本書の価値がいささかもゆるぐものではない。島内の全集落をしらみつぶしに調査し、確かな足どりで徳之島、奄美大島へと進んでいる。さらに他の島へも調査の輪を広げてほしいと願っている。琉球列島における言語の研究が、琉球語にとどまらず日本語全体の歴史的研究に大きく寄与するものであると信じているからである。ゆくゆくは琉球列島全域、さらには日本列島全域を巨視的にながめた島の言語地理学を完成してほしいと願っているのは、ひとりわたしだけではないであろう。

(昭和五十九年二月二十五日発行 秋山書店刊 A5判 五三六ページ 一〇〇〇円)

——東京都立大学助教——

(昭和六十年三月十八日 受理)